

チョウのなかでとりわけすばしこく飛び回る種がセセリチョウの仲間、セセリという和名は花の蜜を吸う際にさかんに口吻を動かす動作＝”せせる”からきています。イチモンジセセリはセ



セリチョウ科のなかではもっともありふれた種で北海道から沖縄、八重山諸島まで広範囲に分布しています。このチョウの学名は *Parnara guttata* で、その種名 *guttata* は“点のある”という意味で、羽の点状模様にもとづいたものです。イチモンジセセリは後翅の白点がきれいに一文字にならんでいることから命名されています。幼虫がイネ科の植物を食べ、かつてはイネの害虫ともなったそうですが、今はエノコログサや

メヒシバ、ススキなどが主な食草だと思われます。思われるとしかいえないのは、他のチョウにくらべて特別きれいでもなく、発生時期にはどこに行っても目につく、チョウ愛好家の言い方で「駄チョウ」の最たるもので、熱心に飼育などをしていないからです。しかし、よく観察すれば目玉がやたら大きくて愛くるしいところがあります。胴体の太さにくらべて小さすぎるように見える鋭角にとがった羽、

この形体こそがセセリチョウの素早い飛翔をもたらしています。イチモンジセセリはときには大群をなして移動をすることもあるチョウ



として有名ですが、西畑の花畑でも秋になるとたくさんの個体が花から花へ飛び回ります。太陽の日差しが届き始める早朝だと、あたりの葉っぱのあちこちで2枚の写真のようにジェット戦闘機にも似た体勢に羽を少しだけ広げて体温の上昇を待っています。右側の写真にみられる個体の左後翅をよくみると、左側の正常個体にはない白い大きな斑点がのぞいて見えます。明らかに斑紋異常の個体で、撮影時にすぐ普通ではないことに気づきましたが、捕獲用のネットを持っていないで手元でじっくり観察することはできていません。このチョウには面白い習性がある、なぜか、気温の高い路面や日あたりのいい葉っぱの上などでなかよく並んでいる様子がしばしば見うけられます。



筆者の子供時代のイチモンジセセリにとっては実にむごい話をしますと、まず、エノコログサの花穂をしごいて糸状とします。そのやわらかい先端部をまるめてチョウの胴体に巻きつけるように軽くしばりつけ、茎の丈夫な根元を手にもってゆらすと先端部でチョウが動く自由度がある羽をふるわせてもがき暴れます。やがて、この動きに気づいたトンボが先端のチョウめがけて飛び掛ってくるので、労せずしてトンボが手づかみにできるという話です。そう、トンボを捕まえるトラップとしてイチモンジセセリを使って遊んだわけで、今のようになりっぱなしな捕虫ネットがない時代の子供のせいっぱいの知恵だったと言い訳をしておきましょう。

沖縄、八重山諸島にはこのチョウに似たユウレイセセリという名のチョウがいるのですが、長いあいだ学名が不明だったことからついた和名だそうで、ウソのような本当の話です。